

東京大学 留学プログラム報告書（プログラム名：2012 IARU Global Summer Program）

所属学部/研究科・学年(留学時)： 法学部第1類3年

留学先大学・参加コース： ケンブリッジ大学・Shaping the world in 21st century

コース期間： 2012年7月8日～2012年8月4日

卒業・修了後の就職希望先： 1.研究職 ②.専門職(弁護士) 3.公務員 4.非営利団体 5.民間企業
6.起業 7.その他()

1. 留学先大学の概要

イギリスのケンブリッジ大学にて4週間(2012年7月8日～8月3日)の IARU Global Summer Program (IARU-GSP) に参加してきました。同時期に一般向けのサマースクールが四つ(歴史、文学、科学、インテリジェンス)開催されており、毎日午前中と夕方はこれら一般のサマースクール参加者とともに様々なトピックについての授業を受講しました。午後には、私たち GSP 向けにディスカッション(週二回)、およびスーパーヴィジョン(週一回)がありました。

スーパーヴィジョンとは、3人組で特定のテーマについてきめ細かな指導を受ける個別授業のことで、毎週エッセイ(2000-3000wordsの小論文)を提出し、そのテーマについて指導教官を交えてディスカッションすることを通してより深い理解を目指す、ケンブリッジ大学伝統の指導方法です。このプログラムのテーマが"Shaping the world in 21st century" ということで、視野を広く持つために一般教養が重視され、授業、小論文、ディスカッションでは幅広いトピックを扱いました。



2. 留学の動機

大学1年次の冬に駒場で開催された IARU Global Summer Program の説明会で、このプログラムを知りました。前年参加者の体験談の中に「サマープログラムで経験したディスカッションやレポート課題はレベルが高く厳しいものであったが、その分日本では経験できない濃密な時間を過ごせた」という言葉があり、それに感銘を受け、自分もそのような学問的な厳しさの中に身を置いて能力を伸ばしたいと考えました。

ケンブリッジ大学が開催するプログラムでは古代の歴史から最先端の科学まで幅広い分野を学べること、そしてケンブリッジ伝統の少人数での小論文指導が4回も組み込まれていることから、知見を広げると同時に、自らの考えを表現するアウトプット力を伸ばす絶好の機会であると考え、このプログラムを選びました。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

2月下旬の応募締切に向けて、1月上旬からケンブリッジ大学のサマープログラムの特徴などをインターネットで調べ、自らの将来の目標とどのようにつながるのかをよく考えて、志望理由を具体化していきました。東大から推薦をいただいた後、ケンブリッジ大学から指導教官2名による推薦状の提出を急遽求められたため、かつてご指導いただいた先生方に急いでお願いしました。また、ケンブリッジ大学オリジナルの英語のオンライン試験(Reading, Listening, Writing)と電話でのインタビューを経て、5月中旬にプログラムへの参加が正式に決定しました。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

1か月間の滞在であったため、ビザは必要ありませんでした。

③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

損保ジャパンの海外旅行保険に加入しました。また、クレジットカード付帯の海外旅行保険にも加入していました。

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

プログラムへの参加が決定した後、法学部に以下の3つの書類を提出しました。

1. 留学許可申請書 2. ケンブリッジ大学からの参加承認通知 3. 留学の目的の説明文書

帰国後はサマープログラムでの学習を法学部での単位として認定してもらうために、以下の3つの書類の提出を予定しています。

1. 成績証明書 2. 授業時間表 3. 習得科目の概要説明

⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

サマープログラム参加応募の際は、1年前に受験した TOEFL のスコアを提出したのですが、出発の6週間ほど前に再度 TOEFL を受験しました。現時点での英語力を計ることと、英語学習のモチベーションを保つための材料とすることが目的でした。結果は1年前よりもリスニング・ライティングが伸びていたものの、ケンブリッジ大学のサマースクール参加目安(各セクション25以上、合計100以上)には届いていなかったため、英語力のさらなる強化が必要であると自覚しました。その後は時々英語の経済誌「The Economist」を読むなどして、英語の感覚を鈍らせないように努めました。

⑥日本から持参の方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

三年生の段階では、東大で英語のレポート・小論文を書いたことがある人は少ないと思います。このプログラムでは毎週小論文の提出が求められるので、事前に英語小論文の書き方の基本を学んでおく必要があります。以下に、私が基本の習得のために使用した本を紹介します。

「アカデミックライティング入門」(吉田友子、1998年、慶応義塾大学出版会)

「A student's Writing Guide」(Gordon Taylor、2009年、Cambridge University Press)

どちらも実践的なアドバイスが載っていて、すぐに応用することができました。

また、今年イギリスは7月中旬まで朝夕が肌寒い日々(日本でいう初秋の気候)が続きました。そのため、寒さ対策で持参したトレーナーや長袖Tシャツ、長ズボンが重宝しました。また、部屋にクローゼットがあるもののハンガーがついていないので、いくつか持参することをお勧めします。衣服の洗濯には、地下に設置されている洗濯機・乾燥機を自由に使用できたのですが、その際洗濯ネットを使用すると便利でした。

4. 留学生活について

①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

Global Summer Program の参加学生は皆、ケンブリッジ中心部に位置する Gonville & Caius College(ゴンビル&キーズカレッジ) の寮に宿泊しました。一人二部屋もらい、私は片方の部屋を寝室、もう一方を勉強部屋にしていました。両方の部屋に大きな机、ベッド、冷蔵庫、本棚、衣類棚がありました。トイレとシャワー、洗濯機・乾燥機は共用でいずれも地下にあり、自由に使用することができました。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

7月中旬までは朝夕が肌寒く、お昼も長袖のシャツ一枚でちょうどよい気候でした。その後は半袖・短パンで過ごせるような暑い日々になりましたが、それでも夜は風が冷たいことがありました。

滞在していたカレッジは市の中心部に位置しており、いつも観光客で賑わっていました。大きな市場やファストフード店、スーパーも近くにあって便利でした。毎日の授業が行われる場所までは10-15分かけて歩いて通いました。

朝食と夕食はカレッジで、昼食はファストフード店で食べていました。朝食は朝8時ころから English Breakfast(マフィンやフルーツとベーコン、目玉焼き、ソーセージ、ビーンズ等のバイキング形式)、昼食はサンドイッチなど、夕食は6時半から前菜(サラダまたはスープ)、メインディッシュ(肉・魚または野菜)、デザート、コーヒーのコース料理が毎日出されました。とてもおいしい食事でした。

お金は、15万円分英ポンドに両替していき、日本円も5万円現金で持参しました。使う予定はなかったのですがクレジットカードも持っていきました。50ポンド紙幣は額が大きすぎて使いにくかったので、10・20ポンド紙幣を増やすことをお勧めします。



③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

治安は良好でした。ただ、観光客が多く時々スリが発生すると聞いていたので注意はしていました。診療所は利用しませんでした。近くにあることは確認していました。また、慣れない環境では知らず知らずのうちに緊張して心や体に負担がかかっていることが多いので、無理はしないようにし、しっかり食べることを心がけました。何か困ったことがあればカレッジのポーター(管理人)に尋ねれば手助けしてくださるので、安心でした。

④留学に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空運賃 156,000 円

前泊ホテル代 8,000 円

授業料・カレッジ滞在費(朝・夕食費を含む) 430,000 円

海外旅行保険代 7,750 円

昼食代 30,000 円

娯楽費(近郊への日帰り旅行やパブでの飲食費) 40,000 円

荷物の一部を日本に送った送料 17,000 円

合計 約 70 万円

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額など)

JASSO 留学生交流支援制度(ショートステイ・ショートビジット) 80,000 円

IARU-Santander GSP Scholarships 2,000 ドル (約 160,000 円)

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

週末や平日夜には多くの文化的な催し物がありました。Cambridge Shakespeare Festival が開催されていて、シェークスピアの「テンペスト」を観に行きました。また、Cambridge Summer Music Festival も開催中で、サマープログラムの仲間とピアノやオルガン等のクラシックコンサートに 3 回行きました。サマースクール参加者のためのケルトダンス体験にも参加し、ケンブリッジの豊かな文化を楽しみました。カレッジ裏の川を小舟で巡るケンブリッジ名物のパンティング(舟遊び)にも2回挑戦しました。

週末には少し足を延ばして近くの町まで、プログラム参加者みんなで出かけました。ケム川沿いをハイキングしたり、中世の街並みが残る、大聖堂がある街に電車で行くなど、イギリス東部の醍醐味を味わうことができました。また、プログラムの担当教授の家に招いていただき、皆でオリンピックの開会式を観ました。このように、学習面のみならず文化体験や観光、人々との交流も思い出深いものとなりました。



5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

- ・科学、文学、歴史、Intelligence をテーマとする多様なトピックについてのレクチャー、ディスカッション
- ・国際関係論に関する個別指導「Supervision」

※単位認定の申請は検討中

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

- ・科学、文学、歴史、Intelligence (認知科学や情報科学などを幅広く網羅)をテーマとする多様なトピックについてのレクチャー

—

毎日午前中に2コマ、夜に1コマありました。どれも一回完結の授業で、それぞれの分野へのイントロダクションを目的としていました。これらのレクチャーは予習・復習は不要でした。具体的な内容の例は、以下の通りです。

科学…クローン技術の発展について。文学…二度の世界大戦がイギリス文学においてどのように描かれたか。歴史…クロムウェルのリーダーシップと彼が抱えたジレンマ。Intelligence…科学者の目で見えるオリンピック、等。

どのレクチャーもその分野を専門として研究を進めている博士・教授が行い、興味深いものでした。レクチャーの最後に設けられた質問の時間における学生と教授のやり取りは非常に活発で、トピックの本質に迫る質問もしばしばありました。レクチャーの後に私たち GSP 参加者のためにディスカッションの時間(1時間)が設けられている授業が、週に2コマありました。これらの授業の後はノートを見返したり、インターネットで基礎知識の補充をするなど、ディスカッションに向けた簡単な準備を行いました。

・国際関係論に関する個別指導「Supervision」

3人の学生とひとりの教授で行われる個別指導。毎週2,000-3,000wordsのエッセイ(小論文)を書き、毎週1回のミーティングの時間にそれらへのフィードバックを教授から受け、さらにディスカッションをします。事前に自分の興味のある分野に関して調査があり、それを受けて私はオーストラリア国立大、コペンハーゲン大からの参加者とともに、国際関係論を専門とする James Mayall 教授の指導を受けることになりました。4個のエッセイのテーマは以下の通りです。

1. 中国の成長が世界政治にもたらす影響 2. 人道的介入における大国の役割 3. EUの政治機構改革 4. アラブスプリングの構造—エジプト革命を例に

スーパーヴィジョンはこのサマープログラムの中で最も厳しく、それと同時に実力養成に大きく貢献する授業でした。個別指導が毎週木曜日の午後に行われ、その週に提出したエッセイについてのフィードバックと、テーマについての発展的解説を受けた後、次週のエッセイのテーマを教授と相談して決めます。教授は地域のみを指定するなど対象の広い質問を設定することが多かったため、その夜と翌日金曜日の夜はテーマに設定された地域についての基礎知識を収集することに時間を費やしました。この際はインターネットを使用したり、ケンブリッジ大学出版や近くの書店で書籍を購入して基礎知識を取り込みました。

週末のうち一日は小旅行に行くなど気分転換に使い、もう一日は主にエッセイの準備に使いました。この時点では教授に提示された広いテーマの中から自分が取り上げる問題を具体的に絞り込み、エッセイの完成形をイメージして論理構成を考え、ゴールから逆算するように、エッセイに盛り込むべき必要な情報をインプットしていきました。この作業が、翌週火曜日の午後まで続きました。そして火曜日の午後から水曜日の午後4時30分の提出締め切りまで、食事とレクチャーの時間、最低限の睡眠時間以外はすべてエッセイの作成に費やし、毎週の課題をなんとかこなしていました。

私は英語での小論文作成に慣れていなかったためかなり時間がかかってしまったのですが、絶対に諦めないという思いで粘りました。他の英語ネイティブの学生も締め切り前までエッセイと格闘する様子が見られ、彼らにとっても決して楽な課題ではなかったようです。

こうして毎週エッセイを書いているうちに、少しずつではありますが、情報整理の要領が良くなったり、アウトプットの形を意識した、論理構成に沿ったインプットができるようになり、少しずつ着実に、当初の目標であった「アウトプット力を高める」ことができました。最大の成果は、ある特定のトピックに関して短期間のリサーチを経て問題の所在を把握し、それを理解・解明するための問いを自力で立てる術を学んだことです。



③学習・研究面でのアドバイス

科学、歴史、文学、Intelligence についての授業を受けたのですが、どの授業もその分野を専攻している学生が満足できるくらいのレベル設定で、全体的にレベルが高かったです。特に、専門用語が頻出する授業は理解が難しかったです。(たとえば、化学の物質名や歴史における宗教用語など)

また、非常に早口だったり発音が明瞭でない先生もいて、聞き取りに苦労することもしばしばありました。授業の理解度は6割～7割程度でした。わからないまま放置するのは嫌だったので、授業終了後、友人に「この部分はどういう意味だったの？」と質問することもありました。こうして、最低でも授業で先生が伝えたかった最も重要なメッセージは理解するように心がけました。

今後留学される方にアドバイスできることは二つあります。まず一つは、英語での専門的な授業に慣れること。“iTunes U”というapple社のサービスが役に立ちます。このサイトでは世界各地の大学の、様々な分野についての授業が無料でダウンロードできます。留学前に聞いておくと、授業の流れや授業中に使われる単語に慣れることができ、現地での授業が理解しやすくなるかもしれません。

私も少し聞いていたのですが、法律や政治学系の授業に偏っていたので、科学・歴史・文学の授業も聞いておけばよかったな、と思っています。

また、“The Economist”や“BBC World News”のPodcast(無料ネット配信番組)も英語に慣れるために利用できます。毎日興味深い話題が入ってくるので、内容面でも充実しています。

二つ目は、わからないときは正直にわからない、と伝えることです。ディスカッションでも、話題に上がっている大切な部分を一度聞き逃すと、その後の議論の本筋を見失ってしまうこともあります。授業もわからないまま放置していたら何も得られません。私の英語力ではカバーしきれない部分も多く、理解に苦しむ場面が何度もありました。サマースクールのような単発の授業が続く状況では、「わからないけれど放置しておいて、なかったことにする」というのが一番楽な選択かもしれません。しかし無視しては何の学習効果も得られません。前述の通り私は、せめて授業の要所だけでも理解するために、わからないことがあったらなるべく友達に聞いてその場で解決する、それでもわからなかったら、自分で調べるようにしていました。わからないときにその疑問を伝えることは大切です。素直に周りに手助けを求めることで、自分の学習が進んだり、逆にみんなもわかっていないということに気づいて疑問を共有でき、新たな学びのチャンスが生まれることもあります。

④語学面での苦労・アドバイス等

上で主に「学習における語学面での苦労」について書いたのですが、ここでは「そのほかの場面における語学面での苦労」について書きます。ネイティブたちの話す速度が速いとき、そして欧米の音楽・映画・本など私が詳しくない話題で盛り上がっているときには日常生活の普通の会話に加わるのも難しいときがありました。ただ、何を話しているか大まかなアイデアをつかんで楽しい雰囲気共有することはできたので、仲間外れにされている感覚を持つことはほとんどありませんでした。

また、「リラックスするためのおしゃべりなのに、その中でたくさん発言できないことを悩みの種にして苦しみに変えてしまっ

は意味がない」と思い、発言できないときも気にしないようにしました。「自分が話せそうな話題で、話したい気分有的时候には発言するし、そうでないときには聞きに徹する」というスタンスでもいいので、語学面で多少の難があっても、仲間とのおしゃべりを通して自分に合った息抜きの仕方をすればいいと思います。私は「自分の話がわかってもらえなかったらどうしよう。」などと心配するのは止めにして、授業のあとに「この授業に関してどう思った?」とか、週末の日帰り旅行中も発見したものや感じたことをすぐに述べ合って感想を共有したり、自然体で、たくさんコミュニケーションを取っていきました。

今まで私は、会話に入れないことがあると「英語もよくわからないし話題も知らない、自分ダメだな…」とってしまうことが多くありました。確かに今回も日本にいるときよりは口数が減ったのですが、会話に関してはそこまで気負わず、自然体で生活すればいい、ということを感じました。

このプログラムはネイティブが約半分いましたが英語を母語とせず学習した人も半分ほどいて、各々の発音にクセがあり、ボキャブラリーにも限界があったため、会話の中でお互いに聞き返すことも多くありました。そのため、わからないときに聞き返すことへの抵抗も和らぎ、コミュニケーションしやすい雰囲気ができていました。他者と会話をすることは、疑問を解消したり喜びや感動を共有するために必須です。最初は英語が完璧でないことが不安で、つい話すことをためらってしまうこともありましたが、余計な心配をせず、自分にできる範囲で積極的にコミュニケーションを取っていけばお互いの仲が近くなり、非常に居心地のいい空間を作ることができます。

語学面での成長としては、はっきりと発音しなくてよい単語、読み飛ばしてよい単語を判別する感覚が向上し、より自然に話し、速く読めるようになったことでした。英語圏に留学すると、短期間であってもこのような自分の成長を感じることができると思います。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

プログラムコーディネーターの Sarah さんと、担当教授の Rob 先生が非常に手厚いサポートをしてくださいました。毎週金曜日の午後に一週間を振り返るグループミーティングの時間が設けられ、私たちの学習がどのように進んでいるか意見を聞いて助言をくださるだけでなく、授業後の時間の楽しみ方や、週末の日帰り旅行の行先のオススメの紹介、Rob 先生の家でオリンピックの開会式をみんなで見るホームパーティーを企画してくださるなど、私たちのプライベートの充実にも気を遣ってくださいました。

Sarah さんをはじめサマースクールのスタッフは常時レクチャーホールに待機していたので、何か困ったことがあればすぐに聞きに行くことができ、万全のサポート体制でした。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

ゴンビル・キーズカレッジの図書館は寮から歩いて数分のところにありました。朝 7 時から夜 1 時まで開館していて、Wi-Fi network も使用できました。サマースクールの学生は図書を借りることはできなかったのですが、館内の机の上に 30 冊までキープすることができたので便利でした。寮ではインターネットが使えなかったこともあり、エッセイの準備・作成は情報を蔵書・ネットから取得できる図書館で行いました。照明やスタンドグラスなどが長い歴史を感じさせる荘厳な雰囲気の図書館で、勉強しやすかったです。

朝食・夕食を食べるカレッジの食堂は、まさに映画「ハリー・ポッター」の中で見た食堂そのものでした。スタンドグラスや紋章のレリーフが天井近くを飾り、高名な卒業生や歴代カレッジ長の肖像画が壁面にびっしりとかけられ、正面奥には来賓と研究員以上の職員のためのテーブルがありました。座席は自由で、GSP プログラムの仲間と話しながら食事をすることもあるし、初めて会った一般のサマースクールの参加者と会話しながら食事をすることもありました。

また、カレッジの中にはバーがあり、毎晩6-10時ころまでオープンしていました。様々な種類のお酒が揃えてあり、ここで仲間とくつろぐこともありました。談話室ではWi-Fi networkを使用できたので多くの人が利用していました。

図書館やレクチャー棟には共用パソコンが設置されていました。ただ、プリンターが設置されている場所が少なかったのは不便でした。完成したエッセイをメール添付で送信すると同時に、印刷してレポートボックスに提出する必要があったため、寮から歩いて15分くらいのところにあるパソコン室まで行って印刷する必要がありました。



8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

ケンブリッジ大学の様子を知るために、大学の公式ウェブサイト(<http://www.cam.ac.uk/>)をよく見ていました。また、大学のサマースクールの一環として行われるプログラムだったので、サマースクールのウェブサイト(<http://www.ice.cam.ac.uk/courses/summer-schools/>)もチェックしました。

また、毎週の課題であったエッセイ(小論文)の書き方を学ぶために、以下の2冊の本を参考にしました。細かい言い回しの例も豊富なので、エッセイ作成中も時々参照していました。

「アカデミックライティング入門」(吉田友子、1998年、慶応義塾大学出版会)

「A student's Writing Guide」(Gordon Taylor、2009年、Cambridge University Press)

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

今後、このIARU-GSPのような短期プログラムを利用して留学経験を積もうと考えている皆さんへ、私がこのプログラムを通して考えた四つのことを伝えようと思います。

まず一つは、「So what?(だから何?)」という疑問。ケンブリッジ大学では歴史・科学・文学といった、私の専攻である法学とはかけ離れた一般教養の授業を受けてきました。滞在中、時折、「法学部のテスト前だというのに自分の専門には直接役立つ見込みのない勉強に時間を費やしていて大丈夫だろうか。」という思いとともに数々の疑問が浮かんできました。「ケンブリッジのサマースクールに参加した。So what?」「様々な科目の授業を受けて、自分の専門を超えた発見があった。So what?」「英語でのインプット、アウトプットが以前よりも上達した。So what?」「初めてのイギリス、歴史が長い、趣深い町での生活を楽しんだ。So what?」

様々な「So what?(だから何?)」が頭によぎりました。いったい今自分がやっていることはどういう意味を持つもので、将来に

どのように役立つのか。自分でもすぐには答えが出せませんでした。悩んでいるとき、ふと思い出されたのが、サマースクールの授業に参加する、仕事を退職された後であろうご老人の多さ。彼らは今後進学するために勉強しているのでもなく、仕事に役立つために新しいことを学んでいるのでもありません。しかし、授業中の彼らは実に楽しそうに目を輝かせて、活発に質問していました。その光景を見て、「勉強すること自体が楽しいから、今自分は勉強しているんだ。」という単純な事実気づきました。一見自分の専攻と関係ないように見えることが、自分の将来にどのように役立つ、もしくは関係してくるのか、今はまだわかりません。それでも、今まで知らなかったことを知り、わからなかったことを理解する、そのこと自体が楽しいから、勉強をする。この素朴な感覚が大切だと思います。そしていつか振り返った時に、今回感じた様々な「この手に残る生の感覚」が思いがけない形でつながって、未来への飛び石となっていたことに気づくかもしれません。Steve Jobs の “connecting the dots” という言葉を、初めて実感とともに理解することができました。今はまだ “So what?” という疑問を感じるかもしれませんが、まずは純粋に学びを楽しんで、今後何らかの形で、ここで学んだことを応用できないか常に自らに問いかけながら学び進んでいけば、この経験は単なる楽しい思い出ではなく、次への道標となるものと信じています。

そして二つ目は「すべてはつながっている」ということ。

今回受けた授業の中で、今まで学んできたことが思わぬ形でつながっていることに驚くことがしばしばありました。

たとえば、歴代米国大統領のリーダーシップに関する授業で、戦時の指揮を執った大統領のリーダーシップはどのように評価されるかについて学びました。そこで「それでは、戦争という危機を未然に防いだ大統領のリーダーシップは、戦争を勝利に導いた大統領と同様に高く評価されてきたのか？」という疑問が浮かびました。この疑問が浮かんだのは、以前外交官の方から聞いた「私の仕事は、あつてはならないことを起こらないままにしておくこと」という言葉が心に残っていて、潜在的なリスクを発現させないまま回避できるか否かは、時の首脳リーダーシップにかかっている、という考えが頭の中にあつたからです。全く別の機会に学んだことがふとしたきっかけで繋がると、学びの世界がぐっと広がります。

プログラム期間中、ケンブリッジ大学博士課程に在学中の東大卒業生にお会いする機会があつたのですが、彼も「学問は突き詰めれば必ずどこかでつながっている。」とおっしゃっていました。今回のプログラムでは英国の詩やヒトゲノム解析の話など、今まで触れたことがなかった話題について学ぶ機会を得ました。自分にとって新しい分野を垣間見て、それらは決して難解なものではなく面白いものなんだ、と気づき、自分の専門領域を超えて新しいものを学ぶことへの意欲が増しました。新たなものを学ぶことに貪欲であることで、自分の人生がより面白く豊かなものになるのだろう、ということを今回のプログラムを通して強く感じました。

三つ目は「留学先で何を学ぶか」について。

科学や現代世界情勢の一般的な解説など地域の特色の影響を受けない授業は、日本で受ける授業の内容とほとんど同じでした。これらに関しては日本で授業を受け、本を読むことによって、ケンブリッジ大学で学ぶレベルに達することは十分に可能であると思います。一方で、ケンブリッジ大学で学ぶことに大きなアドバンテージを感じたのは、イギリスに関する授業、特にイギリス王朝やヨーロッパの歴史、また英文学に関する授業でした。東洋とのかかわりの中で検討されるなど様々な角度から取り上げられ、現地ものは現地で学ぶことが最も望ましいということ強く感じました。現地に出向くことが難しいなら、少なくとも現地の言葉で学ぶべきです。一次資料に目を通すこともできますし、それに関する学術論文の数もはるかに多くあります。また、日本語に翻訳してしまうとその過程で言葉のニュアンスが失われて、かえって理解しにくくなることがあります。実際に私が受けた授業でも、日本で習った時の固有名詞の呼び名と英語名の読み方が違って、何の話をしているのかわからないことがありました。今回はEUに関してのエッセイを書くために資料を調べたり、イギリスの文化・政治に関する授業を受ける中で、英語で学ぶことの有利さを実感しました。今回の経験から、将来、日本の会社法・知的財産法に大きな影響を及ぼしたアメリカの法律を学びにロースクールに留学するか、先進的なビジネス、もしくは公共政策を学びにアメリカの大学院に留学したいという思いが強くなりました。

また、授業後の質疑応答が非常に活発であったのも印象的でした。毎回 75 分の授業の中で、質問の時間が 15 分ほど設けられていました。テーマの核心に迫る質問もあって、授業を理解するのに役立ちました。このような先生と学生の熱いやり取りは日本では見られないもので、留学に行かないとできない貴重な経験です。様々な質問が出たのですが、質問のクオリティは中身、すなわち「皆の理解をどの程度深めるものか」で決まります。質問者の英語が流暢でなくてもその中身が核心を突くものであったため、高い評価を受けた質問が多数ありました。このことから、やはり“かたち”ではなく“中身”がものをいうのだ、と改めて実感しました。

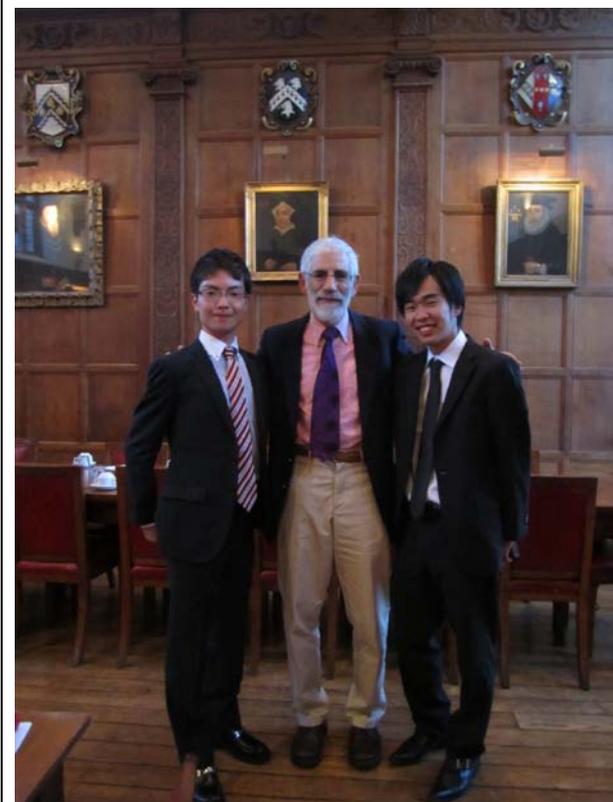
短期留学に行く前は、その準備として日本にいる間に留学先で学ぶ科目の基礎的な勉強をし、留学先ではただ漫然と授業を受けるだけではなく、常に「今自分は何を学んでいるのか」を意識して、各授業から少なくともとにかく一つは次につながる知識や疑問をつかむよう心掛けるべきです。そうすれば、瞬く間に時間が過ぎてゆく短期のプログラムでも、回数が少ない分右から左に流れ去ってしまいがちな授業が、より有意義なものになります。

最後に四つ目は、IARU-GSP のユニークさに関して。

私が参加したケンブリッジ大学のコースには 14 人が参加しました。アメリカ(Yale, UC Berkeley)から 4 人、オーストラリア(ANU)から 2 人、デンマークから 3 人、アジア(シンガポール、北京、東大)から 5 人と、多様なバックグラウンドを持つ参加者たちで、彼らと 1 か月寝食を共にし、ともに学ぶ中でとても仲良くなりました。約半数が法学部生もしくは政治学専攻でしたが、分子生物学や文学、イスラム史学、コミュニケーション学を専攻している人もおり、ディスカッションなどにおいても多様な視点から意見が出てきて面白かったです。このプログラムは授業も多く、その上にディスカッションとエッセイもあったのでアカデミックな話題は豊富でした。移民問題をはじめ、それぞれの国が抱える社会問題について話し合ったり、各国の国民性の紹介をするなど、楽しいだけでなく、学習面でもお互いに刺激しあい、高めあう関係を築くことができました。



④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。





2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

イギリスのケンブリッジ大学にて 4 週間(2012年 7 月 8 日~8 月 4 日)の IARU Global Summer Program (IARU-GSP)に参加してきました。

ケンブリッジ大学が開催するプログラムでは古代の歴史から最先端の科学まで幅広い分野を学べること、そしてケンブリッジ伝統の少人数での小論文指導が 4 回も組み込まれていることから、知見を広げると同時に、自らの考えを表現するアウトプット力を伸ばす絶好の機会であると考え、このプログラムを選びました。

1. 留学生活について

1. 1 授業

イギリスのケンブリッジ大学にて 4 週間(2012年 7 月 8 日~8 月 3 日)の IARU Global Summer Program (IARU-GSP)に参加してきました。同時期に一般向けのサマースクールが四つ(歴史、文学、科学、インテリジェンス)開催されており、毎日午前中と夕方はこれら一般のサマースクール参加者とともに様々なトピックについての授業を受講しました。午後には、私たち GSP 向けにディスカッション(週二回)、およびスーパーヴィジョン(週一回)がありまし

た。

スーパーヴィジョンとは、3 人一組で特定のテーマについてきめ細かな指導を受ける個別授業のことで、毎週エッセイ (2000–3000words の小論文) を提出し、そのテーマについて指導教官を交えてディスカッションすることを通してより深い理解を目指す、ケンブリッジ大学伝統の指導方法です。このプログラムのテーマが”Shaping the world in 21st century” ということ、視野を広く持つために一般教養が重視され、授業、小論文、ディスカッションでは幅広いトピックを扱いました。

午前中…科学、文学、歴史、Intelligence (認知科学や情報科学などを幅広く網羅) をテーマとする多様なトピックについてのレクチャーを2コマ

午後…国際関係論に関する個別指導「Supervision」/グループディスカッション/エッセイ(小論文)作成のための自習

夜…科学、文学、歴史、Intelligence (認知科学や情報科学などを幅広く網羅) に関するレクチャーを1コマ

○科学、文学、歴史、Intelligence (認知科学や情報科学などを幅広く網羅) についての多様なトピックについてのレクチャー

毎日午前中に2コマ、夜に1コマありました。どれも一回完結の授業で、それぞれの分野へのイントロダクションを目的としていました。これらのレクチャーは予習・復習は不要でした。具体的な内容の例は、以下の通りです。

科学…クローン技術の発展について。文学…二度の世界大戦がイギリス文学においてどのように描かれたか。歴史…クロムウェルのリーダーシップと彼が抱えたジレンマ。Intelligence…科学者の目で見えるオリンピック、等。

どのレクチャーもその分野を専門として研究を進めている博士・教授が行い、興味深いものでした。当該分野を専攻している学生が満足できるくらいのレベル設定で、全体的にレベルが高かったです。特に、専門用語が頻出する授業は理解が難しかったです。(たとえば、化学の物質名や歴史における宗教用語など)

また、非常に早口だったり発音が明瞭でない先生もいて、聞き取りに苦労することもしばしばありました。授業の理解度は6割~7割程度でした。わからないまま放置するのは嫌だったので、授業終了後、友人に「この部分はどういう意味だったの？」と質問することもありました。こうして、最低でも授業で先生が伝えたかった最も重要なメッセージは理解するように心がけました。

レクチャーの最後に設けられた質問の時間における学生と教授のやり取りは非常に活発で、トピックの本質に迫る質問もしばしばありました。

レクチャーの後に私たち GSP 参加者のためにディスカッションの時間(1時間)が設けられている授業が、週に2コマありました。これらの授業の後はノートを見返したり、インターネットで基礎知識の補充をするなど、ディスカッションに向けた簡単な準備を行いました。

○国際関係論に関する個別指導「Supervision」

3人の学生とひとりの教授で行われる個別指導。毎週2,000–3,000wordsのエッセイ(小論文)を書き、毎週1回のミーティングの時間にそれらへのフィードバックを教授から受け、さらにディスカッションをします。事前に自分の興味のある分野に関して調査があり、それを受けて私はオーストラリア国立大、コペンハーゲン大からの参加者とともに、国際関係論を専門とする James Mayall 教授の指導を受けることになりました。4個のエッセイのテーマは以下の通りです。

1. 中国の成長が世界政治にもたらす影響 2. 人道的介入における大国の役割 3. EUの政治機構改革 4. アラブ

スプリングの構造—エジプト革命を例に

スーパーヴィジョンはこのサマープログラムの中で最も厳しく、それと同時に実力養成に大きく貢献する授業でした。個別指導が毎週木曜日の午後に行われ、その週に提出したエッセイについてのフィードバックと、テーマに関する発展的解説を受けた後、次週のエッセイのテーマを教授と相談して決めます。教授は地域のみを指定するなど対象の広い質問を設定することが多かったため、その夜と翌日金曜日の夜はテーマに設定された地域についての基礎知識を収集することに時間を費やしました。この際はインターネットを使用したり、ケンブリッジ大学出版や近くの書店で書籍を購入して基礎知識を取り込みました。

週末のうち一日は小旅行に行くなど気分転換に使い、もう一日は主にエッセイの準備に使いました。この時点では教授に提示された広いテーマの中から自分が取り上げる問題を具体的に絞り込み、エッセイの完成形をイメージして論理構成を考え、ゴールから逆算するように、エッセイに盛り込むべき必要な情報をインプットしていきました。この作業が、翌週火曜日の午後まで続きました。そして火曜日の午後から水曜日の午後 4 時 30 分の提出締め切りまで、食事とレクチャーの時間、最低限の睡眠時間以外はすべてエッセイの作成に費やし、毎週の課題をなんとかこなしていました。

私は英語での小論文作成に慣れていなかったためかなり時間がかかってしまったのですが、絶対に諦めないという思いで粘りました。他の英語ネイティブの学生も締め切り前までエッセイと格闘する様子が見られ、彼らにとっても決して楽な課題ではなかったようです。

こうして毎週エッセイを書いているうちに、少しずつではありますが、情報整理の要領が良くなったり、アウトプットの形を意識した、論理構成に沿ったインプットができるようになり、少しずつ着実に、当初の目標であった「アウトプット力を高める」ことができました。最大の成果は、ある特定のトピックに関して短期間のリサーチを経て問題の所在を把握し、それを理解・説明するための問いを自力で立てる術を学んだことです。

1. 2余暇の過ごし方

週末や平日夜には多くの文化的な催し物がありました。Cambridge Shakespeare Festival が開催されていて、シェークスピアの「テンペスト」を観に行きました。また、Cambridge Summer Music Festival も開催中で、サマープログラムの仲間とピアノやオルガン等のクラシックコンサートに3回行きました。サマースクール参加者のためのケルトダンス体験にも参加し、ケンブリッジの豊かな文化を楽しみました。カレッジ裏の川を小舟で巡るケンブリッジ名物のパンティング(舟遊び)にも2回挑戦しました。

週末には少し足を延ばして近くの町まで、プログラム参加者みんなで出かけました。ケム川沿いをハイキングしたり、中世の街並みが残る、大聖堂がある街に電車で行くなど、イギリス東部の醍醐味を味わうことができました。また、プログラムの担当教授の家に招いていただき、皆でオリンピックの開会式を観ました。このように、学習面のみならず文化体験や観光、人々との交流も思い出深いものとなりました。

1. 3大学の設備や生活環境について

Global Summer Program の参加学生は皆、ケンブリッジ中心部に位置する Gonville & Caius College(ゴンビル&キーズカレッジ)の寮に宿泊しました。一人二部屋もらい、私は片方の部屋を寝室、もう一方を勉強部屋にしていました。両方の部屋に大きな机、ベッド、冷蔵庫、本棚、衣類棚がありました。トイレとシャワー、洗濯機・乾燥機は共用で

いずれも地下にあり、自由に使用することができました。

滞在していたカレッジは市の中心部に位置しており、いつも観光客で賑わっていました。大きな市場やファストフード店、スーパーも近くにあって便利でした。毎日の授業が行われる場所までは10-15分かけて歩いて通いました。

朝食と夕食はカレッジで、昼食はファストフード店で食べていました。朝食は朝8時ころから English Breakfast(マフィンやフルーツとベーコン、目玉焼き、ソーセージ、ビーンズ等のバイキング形式)、昼食はサンドイッチなど、夕食は6時半から前菜(サラダまたはスープ)、メインディッシュ(肉・魚または野菜)、デザート、コーヒーのコース料理が毎日出されました。とてもおいしい食事でした。

ゴンビル・キーズカレッジの図書館は寮から歩いて数分のところにありました。朝7時から夜1時まで開館していて、Wi-Fi networkも使用できました。サマースクールの学生は図書を借りることはできなかったのですが、館内の机の上に30冊までキープすることができたので便利でした。寮ではインターネットが使えなかったこともあり、エッセイの準備・作成は情報を蔵書・ネットから取得できる図書館で行いました。照明やスタンドグラスなどが長い歴史を感じさせる荘厳な雰囲気のある図書館で、勉強しやすかったです。

朝食・夕食を食べるカレッジの食堂は、まさに映画「ハリー・ポッター」の中で見た食堂そのものでした。スタンドグラスや紋章のレリーフが天井近くを飾り、高名な卒業生や歴代カレッジ長の肖像画が壁面にびっしりとかけられ、正面奥には来賓と研究員以上の職員のためのテーブルがありました。座席は自由で、GSPプログラムの仲間と話しながら食事をすることもあるし、初めて会った一般のサマースクールの参加者と会話しながら食事をするもありました。また、カレッジの中にはバーがあり、毎晩6-10時ころまでオープンしていました。様々な種類のお酒が揃えてあり、ここで仲間とくつろぐこともありました。談話室ではWi-Fi networkを使用できたので多くの人が利用していました。

2. 今後留学される方へのアドバイス

2.1 学習について

留学生生活を有意義なものとするために私が重要だと思うことは二つあります。まず一つは、英語での専門的な授業に慣れること。"iTunes U" という apple 社のサービスが役に立ちます。このサイトでは世界各地の大学の、様々な分野についての授業が無料でダウンロードできます。留学前に聞いておくと、授業の流れや授業中に使われる単語に慣れることができ、現地での授業が理解しやすくなるかもしれません。

私も少し聞いていたのですが、法律や政治学系の授業に偏っていたので、科学・歴史・文学の授業も聞いておけばよかったな、と思っています。

また、"The Economist" や "BBC World News" の Podcast(無料ネット配信番組)も英語に慣れるために利用できます。毎日興味深い話題が入ってくるので、内容面でも充実しています。

二つ目は、わからないときは正直にわからない、と伝えることです。ディスカッションでも、話題に上がっている大切な部分を一度聞き逃すと、その後の議論の本筋を見失ってしまうこともあります。授業もわからないまま放置していたら何も得られません。私の英語力ではカバーしきれない部分も多く、理解に苦しむ場面が何度もありました。サマースクールのような単発の授業が続く状況では、「わからないけれど放置しておいて、なかったことにする」というのが一番楽な選択かもしれません。しかし無視しては何の学習効果も得られません。前述の通り私は、せめて授業の要所だけでも理解するために、わからないことがあったらなるべく友達に聞いてその場で解決する、それでもわからなかったら、自分で調べるようにしていました。わからないときにその疑問を伝えることは大切です。素直に周りに手助けを求めることで、自分の学習が進んだり、逆にみんなもわかっていないということに気づいて疑問を共有でき、新たな学びのチャンスが生まれることもあります。

2. 2日常生活について

ネイティブたちの話す速度が速いとき、そして欧米の音楽・映画・本など私が詳しくない話題で盛り上がっているときには日常生活の普段の会話に加わるのも難しいときがありました。ただ、何を話しているか大まかなアイデアをつかんで楽しい雰囲気共有することはできたので、仲間外れにされている感覚を持つことはほとんどありませんでした。また、「リラックスするためのおしゃべりなのに、その中でたくさん発言できないことを悩みの種にして苦しみに変えてしまっただけ意味がない」と思い、発言できないときも気にしないようにしました。「自分が話せそうな話題で、話したい気分ときには発言するし、そうでないときには聞きに徹する」というスタンスでもいいので、語学面で多少の難があっても、仲間とおしゃべりを通して自分に合った息抜きの仕方をすればいいと思います。私は「自分の話がわかってもらえなかったらどうしよう。」などと心配するのは止めにして、授業のあとに「この授業に関してどう思った？」とか、週末の日帰り旅行中も発見したものや感じたことをすぐに述べ合っただけ感想を共有したり、自然体で、たくさんコミュニケーションを取っていききました。

今まで私は、会話に入れないことがあると「英語もよくわからないし話題も知らない、自分ダメだな…」と思ってしまうことが多くありました。確かに今回も日本にいるときよりは口数が減ったのですが、会話に関してはそこまで気負わず、自然体で生活すればいい、ということを感じました。

このプログラムはネイティブが約半分いましたが英語を母語とせず学習した人も半分ほどいて、各々の発音にクセがあり、ボキャブラリーにも限界があったため、会話の中でお互いに聞き返すことも多くありました。そのため、わからないときに聞き返すことへの抵抗も和らぎ、コミュニケーションしやすい雰囲気ができていました。他者と会話することは、疑問を解消したり喜びや感動を共有するために必須です。最初は英語が完璧でないことが不安で、つい話すことをためらってしまうこともありますが、余計な心配をせず、自分にできる範囲で積極的にコミュニケーションを取っていけばお互いの仲が近くなり、非常に居心地のいい空間を作ることができます。

語学面での成長としては、はっきりと発音しなくてよい単語、読み飛ばしてよい単語を判別する感覚が向上し、より自然に話し、速く読めるようになったことでした。英語圏に留学すると、短期間であってもこのような自分の成長を感じることができると思います。

3. プログラムに参加した感想

このプログラムを通して、以下の四つのことを考えました。

まず一つは、「So what?(だから何?)」という疑問。ケンブリッジ大学では歴史・科学・文学といった、私の専攻である法学とはかけ離れた一般教養の授業を受けてきました。滞在中、時折、「法学部のテスト前だというのに自分の専門には直接役立つ見込みのない勉強に時間を費やして大丈夫だろうか。」という思いとともに数々の疑問が浮かんできました。「ケンブリッジのサマースクールに参加した。So what?」「様々な科目の授業を受けて、自分の専門を超えた発見があった。So what?」「英語でのインプット、アウトプットが以前よりも上達した。So what?」「初めてのイギリス、歴史が長い、趣深い町での生活を楽しんだ。So what?」

様々な「So what?(だから何?)」が頭によぎりました。いったい今自分がやっていることはどういう意味を持つもので、将来にどのように役立つのか。自分でもすぐには答えが出せませんでした。悩んでいるとき、ふと思い出されたのが、サマースクールの授業に参加する、仕事を退職された後であろうご老人の多さ。彼らは今後進学するために勉強しているのでもなく、仕事に役立てるために新しいことを学んでいるのでもありません。しかし、授業中の彼らは実に楽しそうに目を輝かせて、活発に質問していました。その光景を見て、「勉強すること自体が楽しいから、今自分は勉強して

いるんだ。」という単純な事実に気づきました。一見自分の専攻と関係ないように見えることが、自分の将来にどのように役立つ、もしくは関係してくるのか、今はまだわかりません。それでも、今まで知らなかったことを知り、わからなかったことを理解する、そのこと自体が楽しいから、勉強をする。この素朴な感覚が大切だと思います。そしていつか振り返った時に、今回感じた様々な「この手に残る生の感覚」が思いがけない形でつながって、未来への飛び石となっていたことに気づくかもしれません。Steve Jobs の “connecting the dots” という言葉を、初めて実感とともに理解することができました。今はまだ “So what?” という疑問を感じるかもしれませんが、まずは純粋に学びを楽しんで、今後何らかの形で、ここで学んだことを応用できないか常に自らに問いかけながら学び進んでいけば、この経験は単なる楽しい思い出ではなく、次への道標となるものと信じています。

そして二つ目は「すべてはつながっている」ということ。

今回受けた授業の中で、今まで学んできたことが思わぬ形でつながっていることに驚くことがしばしばありました。

たとえば、歴代米国大統領のリーダーシップに関する授業で、戦時の指揮を執った大統領のリーダーシップはどのように評価されるかについて学びました。そこで「それでは、戦争という危機を未然に防いだ大統領のリーダーシップは、戦争を勝利に導いた大統領と同様に高く評価されてきたのか？」という疑問が浮かびました。この疑問が浮かんだのは、以前外交官の方から聞いた「私の仕事は、あってはならないことを起こらないままにしておくこと」という言葉が心に残っていて、潜在的なリスクを発現させないまま回避できるか否かは、時の首脳リーダーシップにかかっている、という考えが頭の中にあっただけでした。全く別の機会に学んだことがふとしたきっかけで繋がると、学びの世界がぐっと広がります。

プログラム期間中、ケンブリッジ大学博士課程に在学中の東大卒業生にお会いする機会があったのですが、彼も「学問は突き詰めれば必ずどこかでつながっている。」とおっしゃっていました。今回のプログラムでは英国の詩やヒトゲノム解析の話など、今まで触れたことがなかった話題について学ぶ機会を得ました。自分にとって新しい分野を垣間見て、それらは決して難解なものではなく面白いものなんだ、と気づき、自分の専門領域を超えて新しいものを学ぶことへの意欲が増しました。新たなものを学ぶことに貪欲であることで、自分の人生がより面白く豊かなものになるのだろう、ということを感じました。

三つ目は「留学先で何を学ぶか」について。

科学や現代世界情勢の一般的な解説など地域の特色の影響を受けない授業は、日本で受ける授業の内容とほとんど同じでした。これらに関しては日本で授業を受け、本を読むことによって、ケンブリッジ大学で学ぶレベルに達することは十分に可能であると思います。一方で、ケンブリッジ大学で学ぶことに大きなアドバンテージを感じたのは、イギリスに関する授業、特にイギリス王朝やヨーロッパの歴史、また英文学に関する授業でした。東洋とのかかわりの中で検討されるなど様々な角度から取り上げられ、現地のは現地でするのが最も望ましいということを感じました。現地に出向くことが難しいなら、少なくとも現地の言葉で学ぶべきです。一次資料に目を通すこともできますし、それに関する学術論文の数もはるかに多くあります。また、日本語に翻訳してしまうとその過程で言葉のニュアンスが失われて、かえって理解しにくくなることがあります。実際に私が受けた授業でも、日本で習った時の固有名詞の呼び名と英語名の読み方が違って、何の話をしているのかわからないことがありました。今回は EU に関してのエッセイを書くために資料を調べたり、イギリスの文化・政治に関する授業を受ける中で、英語で学ぶことの有利さを実感しました。今回の経験から、将来、日本の会社法・知的財産法に大きな影響を及ぼしたアメリカの法律を学びにロースクールに留学するか、先進的なビジネス、もしくは公共政策を学びにアメリカの大学院に留学したいという思いが強くなりました。

また、授業後の質疑応答が非常に活発であったのも印象的でした。毎回 75 分の授業の中で、質問の時間が 15 分ほど設けられていました。テーマの核心に迫る質問もあって、授業を理解するのに役立ちました。このような先生と学生の熱いやり取りは日本では見られないもので、留学に行かないとできない貴重な経験です。様々な質問が出たのですが、質問のクオリティは中身、すなわち「皆の理解をどの程度深めるものか」で決まります。質問者の英語が流暢でなくてもその中身が核心を突くものであったため、高い評価を受けた質問が多数ありました。このことから、やはり“かたち”ではなく“中身”がものをいうのだ、と改めて実感しました。

短期留学に行く前は、その準備として日本にいる間に留学先で学ぶ科目の基礎的な勉強をし、留学先ではただ漫然と授業を受けるだけではなく、常に「今自分は何を学んでいるのか」を意識して、各授業から少なくともなにか一つは次につながる知識や疑問をつかむよう心掛けるべきです。そうすれば、瞬間に時間が過ぎてゆく短期のプログラムでも、回数が少ない分右から左に流れ去ってしまいがちな授業が、より有意義なものになります。

最後に四つ目は、IARU-GSP のユニークさに関して。

私が参加したケンブリッジ大学のコースには 14 人が参加しました。アメリカ(Yale, UC Berkeley)から 4 人、オーストラリア(ANU)から 2 人、デンマークから 3 人、アジア(シンガポール、北京、東大)から 5 人と、多様なバックグラウンドを持つ参加者たちで、彼らと 1 か月寝食を共にし、ともに学ぶ中でとても仲良くなりました。約半数が法学部生もしくは政治学専攻でしたが、分子生物学や文学、イスラム史学、コミュニケーション学を専攻している人もおり、ディスカッションなどにおいても多様な視点から意見が出てきて面白かったです。このプログラムは授業も多く、その上にディスカッションとエッセイもあったのでアカデミックな話題は豊富でした。移民問題をはじめ、それぞれの国が抱える社会問題について話し合ったり、各国の国民性の紹介をするなど、楽しいだけではなく、学習面でもお互いに刺激しあい、高めあう関係を築くことができました。

今回のプログラムは、私にとって今まで最も長い海外での学習経験でした。本気で学び、ケンブリッジでの生活を満喫する中で日本ではできない貴重な経験をたくさん積むことができました。このような素晴らしい経験ができたのも、日本学生支援機構様からのご支援をいただいたおかげです。本当にありがとうございました。今後はこの経験を糧に、さらに勉学に励みたいと思います。

東京大学 留学プログラム報告書 (プログラム名:2012 IARU Global Summer Program)

所属学部/研究科・学年(留学時): 法学部4年

留学先大学・参加コース: University of Cambridge Shaping the World: Understanding the Past, Predicting the Future

コース期間: 2012年7月8日 ~ 2012年8月4日

卒業・修了後の就職希望先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) 3.公務員 4.非営利団体 5.民間企業
6.起業 7.その他()

1. 留学先大学の概要

イギリスにある、世界でも有数の大学。特に研究大学としての評価が高い。

2. 留学の動機

自分が生まれた場所であるイギリスで勉強をしてみたいという思いと、世界有数の大学から選抜されたメンバーとケンブリッジという最高の環境で切磋琢磨してみたかったら。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

ケンブリッジ大学でのプログラムは英語力を厳しく見られるので、ある程度の TOEFL の点数(出来れば iBT で 100 点以上、少なくとも 90 点)を持っておくと良いと思う。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

ビザは必要なし。ただ、入国審査は割と厳しめなので、ケンブリッジ大学から発行される公式のレターを事前に印刷して常に携帯しましょう。

③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

クレジットカード付帯の保険を使用。

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

留学の手続き、単位交換の手続き(予定)

⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

アメリカに一年間留学していたため、ある程度の英語力はあったかと思う。英語の準備は特にしなかった。

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

日本のお土産があると良い。7月には雨がほぼ毎日降っていたので折りたたみの傘があると良い。また、レインコートもあれば尚良し。英語が不安な場合はしっかりと英語の勉強(特にリスニングとライティング)をした方が良いと思う。

4. 留学生活について

①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

大学のカレッジの寮に宿泊。大学側の手配だが、宿泊料自体は他の大学に比べて割高。今回泊まったカレッジの寮では Wifi 環境がなかったが、広さは必要以上に広がった。ちなみに全員シングル部屋である。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

雨の日が多かった。夜は冷え込むことが多く、夏とは思えなかった。大学が町の中心であり、歴史があった。夏休み

だったので観光客が異常に多かった。食事は基本的に大学寮でお昼はカフェなどでとった。お金は基本的に全てクレジットカードで済ませた

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

治安は良い方だと思う。医療費は日本に比べて高い。体調の悪い時は無理をしなかった。

④留学に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

授業料+寮費 約 43 万、航空券 約 8 万円(マイル使用のため)、生活費・娯楽費 約 5 万~10 万円

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額など)

JASSO 8 万円、Banco Santander 2,000ドル(約 16 万円)

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

休日は近郊の都市に GSP のメンバーと訪れた。シェイクスピアの劇や音楽コンサートにも足を運んだ。

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

授業よりも Supervision というエッセイを書いて、それに関して少人数で議論をするというものに中心が置かれていた。その他に、歴史、古代帝国、科学、インテリジェンスなどのレクチャーに幅広く出席した。

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

基本的にエッセイを中心に留學生活が動いていた。授業への予習や復習は特になかった。

③学習・研究面でのアドバイス

毎週 2,000~3,000 words のエッセイを書かなければならず、英語で論文を書くことに慣れていない場合は非常に苦勞をと思う。プログラムで求められる英語レベルも高く、英語力をしっかりと鍛えることが参加の前提となる。

④語学面での苦勞・アドバイス等

参加者の英語レベルは非常に高い。語学は努力するに限ると思う。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

留学生のサポートは特はないが、GSP を担当する大学のフェローの方には非常に良くして頂いた。何か問題があれば、すぐに相談に乗ってもらえると思う。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

総合図書館は使用不可で、カレッジ付属の図書館を常に利用していた。キャンパスには大学の Wifi が飛んでいる。食事は殆ど全てカレッジのダイニングホールで支給された。勉強する環境としては非常に良かったと思う。

8. その他

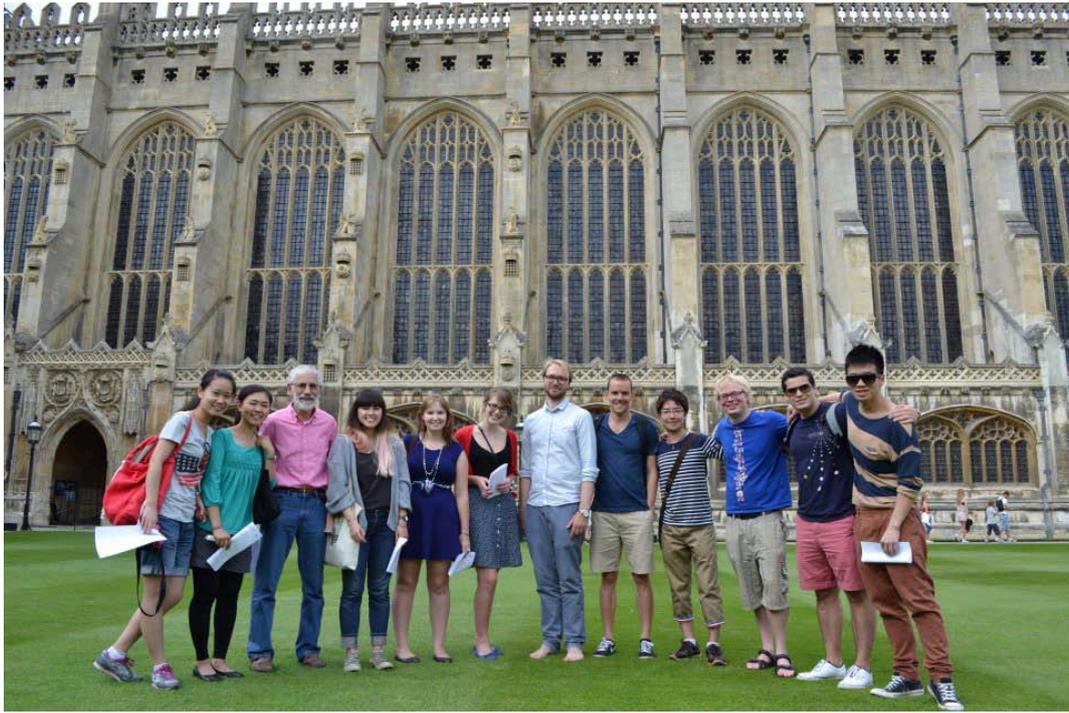
①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

特になし。

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

一ヶ月という短期留学ではあるが、内容は非常に濃く、また学習面でも非常にチャレンジングであると思う。英語で発言する機会や論文を書く量が多く、決して楽ではないが、得るものはそれ以上にあると思う。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。



2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

ケンブリッジという環境で

ロンドンから電車で一時間ほど離れたところにある、ケンブリッジという非常に歴史のある都市、またその大学寮での生活は恵まれたもので、勉強に集中できる環境であった。GSPのグループは7大学から計14名が参加しており、一ヶ月間行動を共にしていたため非常に親しくなることができた。このような環境に身を置く機会を提供して頂いたことに感謝をするとともに、ここでの一ヶ月間のケンブリッジでの短期留学を振り返ってみたい。

英国ケンブリッジ大学での約一ヶ月にわたる IARU のプログラムは、Supervision という教員一人と学生三人程度で行われるディスカッションを中心に、サマースクールの授業への参加や、GSP の学生向けへのディスカッションの開催など、実に多様性に富んだプログラムであった。グループ毎に割り振ら

れたトピックに関しての2,000～3,000語のレポートを毎週執筆し、それをSupervisionで教員や他の学生と議論した。これは少人数の議論であるので非常に内容が濃く、また要求されるものも多かった。私のグループは歴史全般に関するトピックが多かったのだが、「歴史とは何か」「歴史における自伝の役割は何か」「歴史家は映画や文学を軽視すべきでないか」など、答えのないようなトピックに関してレポートを執筆し、アカデミックの世界でなされている議論を踏まえつつ、自分の意見をしっかりと書き出すことが重要視されるような内容であった。このような少人数制の教育は東京大学では少なく、教育環境の良さを改めて実感した。サマースクールの授業自体は大人数授業でかつ、一般のサマースクール生と共に受講するというので、少人数で各メンバーの大学から選抜された学生が集まるというIARUの良さは正直無かったが、幅広いトピックに関する授業が開講されていた。特に、自然科学や文学に関する授業は日本では受講する機会があまりなかったため、自分の知見を広げることができた。

学習外では、休日に近場の都市を訪問したり、シャイクスピアの劇や音楽コンサートなどにも顔を出したりした。ケンブリッジの町自体は小さいのだが、様々な観光スポットがあり、また有名なパンティングも何度か体験した。また、エッセイの提出後にはGSPのメンバーでパブに出かけたりするなど、振り返ってみれば実に充実した一ヶ月間であった。今回のイギリス滞在中にロンドン夏季オリンピックが開催され、GSP担当のケンブリッジのフェローの方の家に招いて頂き、GSPメンバーで開会式を観ることができたのは良い思い出である。

留学、学習、国際理解への意欲に関する参加前、参加後の変化

参加前と参加後で変化したのは、やはり海外の大学で学びたいという気持ちである。以前より、アメリカもしくはイギリスの大学院で学びたいと考えていたが、その思いが一層強まった。世界の有名大学から来ている学生の意識やレベルも非常に高く、刺激となるとともに、自分の視野を広げることが出来た。今まで様々な国際学生団体への参加や運営をしてきたので、国際理解への意欲というよりは、学問をもっと追求して勉強したいという意欲に駆られた。研究環境としてはケンブリッジやオックスフォードは、施設や指導教員など様々な面で最高の環境だと感じた。非英語圏の国からの参加者も留学経験者が殆どで、英語は不自由なく使えていた。エッセイの量が中々多かったためにそれに苦しめられたが、課題をこなしていくうちに自分が成長しているのも同時に感じた。

東京大学の学部では、初めの約二年間はリベラルアーツ教育と呼ばれる、様々な授業が受講できる環境である。しかしながら、後半の二年間で専門性を詰め込むというのは中々厳しく、専門性を追求するにはやや短期間過ぎる気もする。アメリカのリベラルアーツカレッジで実際にリベラルアーツ教育を体験した私自身からすると、リベラルアーツ教育という面でもやや中途半端ではないのかという気もした。さらに話はずれるが、コモンウェルス共通の文化というのも感じた。イギリス、オーストラリア、シンガポールで共通の教育制度や法制度があり、また文化面でも共有する部分が多かったのは印象的であった。

参加後の次の海外留学への関心

アメリカに留学した経験があったため、参加後の次の海外留学への関心というのは、初めて海外留学をした人と比べるとやや異なるかと思う。今回ケンブリッジ大学で学んで実感したことは、国が違えば環境も違うということであった。イギリスの大学、とくにオックスブリッジにおいては独特の文化があ

るように感じた。制度的にもアメリカでは修士取得に通常2年要するのに対し、イギリスでは1年である。また、オックスブリッジではカレッジ制が取られており、学生は大学ではなく、それぞれのカレッジに属することになる。驚くことに、カレッジの敷地や建物は全て各カレッジの私有財産であり、学部にアプライする時は大学ではなくカレッジに直接アプライするのだ。

専門や卒業後の希望進路によって大学の選択も重要になってくる。例えば、国連機関などで働きたい場合はイギリスではLSE、アメリカでは国連本部の位置するニューヨークのあるコロンビア大学が強いなどと言われている。また、他に大きな問題として、学費をどうするかという問題もあるが、ケンブリッジのPhDのプログラムで非常に良い奨学金が大学から提供されており、また修士号でも様々な奨学金の選択肢があるため、これも今後しっかりと調べたいと思う。こうしたことも考慮にいれつつ、今後の大学院進学の可能性について真剣に考えて行きたい。

今回の短期留学を通じて、Supervisionの教員や、他の参加学生から様々な修士号や博士号のプログラムを教えてもらい、本格的に大学院進学も視野にいれることが出来た。実際にアプライするとなるとまた障害が出てくるとは思うが、この留学がなければ恐らくその意志さえなかったことだろうと思う。また、1ヶ月間だけという、以前のアメリカ留学に比べればだいぶ短期の留学だったため初めはその成果にやや懐疑的な部分もあったが、少人数制の教育とケンブリッジという環境での1ヶ月は刺激的で非常にやりがいのありかつ有益な短期留学であった。